
米山俊直先生を偲ぶ

松田素二

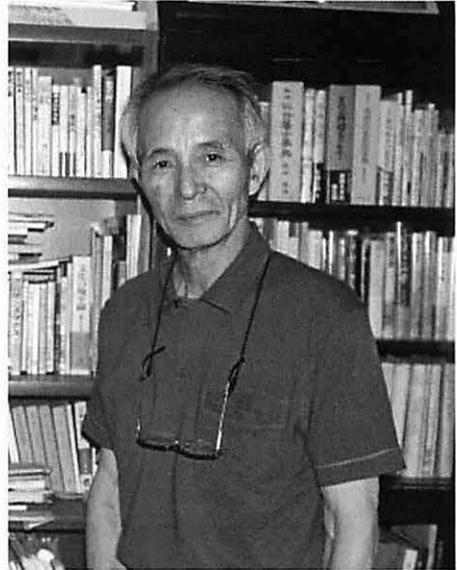
日本のアフリカ研究のパイオニア的存在であった、文化人類学者の米山俊直先生は、2006年3月9日、京都の病院で逝去された。享年、75歳であった。逝去から半年後の2006年10月1日には、京都大学の稲盛・山内ホールで「感謝する集い」が開かれ、米山先生から縁を得た200名近くの人々が参加し先生を偲び感謝の気持ちを新たにしました。本学会の創立以来の会員であった先生に思いを馳せ改めてご冥福をお祈りしたい。

永遠への旅立ち

米山さんは、元来、身体強健な方だった。1982年、南米アンデスで高山病になり意識不明で緊急帰国されたときも、心筋梗塞で発作を頻発されたときも、みごとに病いを乗り越え、以前にもまして活動的になられた。2004年6月には、かねてから念願だった、宮城県の栗駒行きを計画し、2006年7月の選挙でみごと滋賀県知事に当選した嘉田由紀子さん、古川彰さんと私も同行して三泊四日の旅をした。四半世紀以上も前にフィールドでお世話になった方々に再会し、つきない話をおいしいお酒と一緒に楽しまれた。最初に下宿した千葉家では、当時の幼子信夫さんが当主となって迎えてくれた。

翌7月にはロンドンにご夫妻で滞在され、アメリカから来た娘リサさん夫妻とともにイングランド観光を楽しまれた。さらに9月初旬には、ニューヨークに飛び、国連で開催されていた神道の国際会議において「日本人とコメ」に関して講演を行うなど、精力的な活動をつづけておられた。ただ8月に胃の不調を感じた先生は、アメリカ講演旅行後に病院での精密検査を予約されていた。その検査の結果、進行した悪性の胃がんと診断され、ほっておけば余命1年未満と告知される。電話をもらって、大慌てで駆けつけると、いつもの飄々とした風で「あと何ヶ月」と他人ごとのように説明しながら、「なるようになりますから」とおっしゃるのだった。

2004年10月に胃の全摘手術を行い、11月には退院された。以降、抗がん治療をつづけることになった。抗がん治療は、相当にきつかったものの効果をあげ、2005年の春から夏にかけては、シンポや会議に出席したり、出張したりという「回復」ぶりであった。米山さんご自身には、主治医から「抗がん治療の効果は一時的」と言われていたものの、持ち前の楽天主義で「がん、なおっちゃうかもしれないね」と言いながら、仁和寺まで散策の足をのばされていた。しかし手術後1年を迎えた、2005年の秋から冬にかけて、ガンマーカーが極端に上昇し、抗がん剤の点滴後、体力気力も徐々に衰えて



在りし日の米山先生（研究室で）

こられた。

2006年の元旦を、家族3人で迎えた先生は、2月はじめには、主治医から「余命3ヶ月」の宣告を受ける。しかしその2日後には、奈良女子大学で開催された「なら学シンポ」に出席、用意された原稿をもとに1時間の講演をされた。そのシンポには、各地から米山先生に教えを受けた「チルドレン」が駆けつけた。そのなかで、ご自分の余命について冗談まじりに、3ヶ月の宣告後数日たったのであと、87日と話され、先生のご病状について何も知らない聴衆を笑わせておられた。講演のなかで、先生は、「最近、あっちの世界とこっちの世界をよく行き来する」「このごろようやく思い至ったのは、from here to eternity ということだ」と語られた。ジェームズ・ジョーンズの原作で、バート・ランカスター、デボラ・カー主演で映画にもなった、『地上より永遠に』は、真珠湾攻撃直前のアメリカ軍基地における不条理な軍隊生活を描写した作品だが、先生は、今、ここに生きていることが、永遠性を獲得することに強く共感されたようだった。

なら学シンポをこなした先生は、その後食欲をなくされ検査のため訪れた病院にそのまま入院、その後ご自宅に戻ることはなかった。2006年3月、体調を心配して緊急に帰国したりサさんの見舞いをうけたときには、半分意識混濁状態にありながら、「大丈夫」と応えられた。3月8日、病状安定をみて安心したりサさんがアメリカに発つと、にわか病状が急変し、リサさんがアメリカの自宅に到着されたちょうどその時間に、眠るように息をひきとられた。日本時間では9日の午前7時半であった。生前の先生のご意志にしたがい延命治療は施されなかった。

葬儀は、近親者のみの無宗教、密葬の形で、リサさんの帰国を待って3月19日にとりおこなわれた。先生の好きなモーツァルトの調べが流れるなか、思い出を語り感謝するスピーチに包まれて先生は eternity の世界に旅立たれた。

米山学とアフリカ学

米山さんの仕事は、人類学、民俗学、農村社会学、文明学、アフリカ学など、広範な研究領域をカバーしている。こうした研究面に加えて、京都人類学談話会（通称近衛ロンド）の組織運営、京都大学における文化人類学教室の創設、学長として大手前大学共学化の実現、国際京都学協会の創立など、研究行政面、とくに新しい分野を開拓することにおいては圧倒的な手腕を発揮された。権威主義をもっとも嫌悪した米山さんは、偉大なアマチュアリズムの実践者として、政官財界の審議会や懇談会から、学界のシンポやセミナー、市民向けの講座や小研究会にいたるまで、呼ばれるところにはどこにでも出かけて、自由闊達な発想を提供した。

米山さんは、1950年代後半から日本の農山村の人類学的フィールドワークに取りくまれてきたが、1960年代後半からは、京都大学の今西錦司先生を隊長とするアフリカ調査に参加し、都市と農村をつなぐ文明史を基軸とした独特の米山アフリカ学を築きあげてきた。

1960年代、ジュリアン・スチュアートのもとで院生生活を共に過ごしたアメリカの人類学者、トーマス・バイデルマンは、米山さんのアフリカ研究を高く評価している海外の学者の一人である。タンザニアのイラク社会、マリのパンバラ社会、モロッコ・フェズの都市社会と米山先生はいくつものフィールドをかけまわったが、もっとも長期間滞在し、もっとも思い入れの大きかったフィールドは、東部ザイール（現コンゴ民主共和国）テンボ社会であった。

米山俊直、赤阪賢、梶茂樹、末原達郎で構成されていたテンボ研究のチームは、文化人類学、言語学、農学とさまざまな方法論を組み合わせ、テンボ人の社会にアプローチしていた。テンボ人は、

コンゴ民主共和国の東端にある大地溝帯の中に位置するミトゥンバ山脈の西側斜面に住む農耕民である。東側にキブ湖やエドワード湖が連なり、西側には広大なコンゴ盆地の熱帯雨林が広がっている。ちょうどその稜線沿いにテンボ人は住んでいた。社会的にも文化的にも特色があり、熱帯雨林の先住者と考えられていたムブティ・ピグミーと呼ばれる背の低い狩猟採集民と共存していた。

米山さんは、なかでも街道沿いにある定期市の集落に関心を持った。街道沿いの定期市は、都市的な要素と農村的な要素の両方をあわせもつ存在であり、両者がぶつかり合う場所でもあった。特に定期市の開かれるブランビカには、州都ブカブから、雨季には道路が寸断されることがあるとはいえ、まがりなりにも舗装道路が続いていた。したがって、この舗装道路を通して、週に何度か街道沿いのいくつかの定期市集落で開かれる市のために、トラックが行きかっていた。米山さんは、この街道沿いの定期市の集落に焦点を当て、これを都市の起源としてとらえようとした。ブランビカは、他民族が入り混じり、独特の価値観の形成がなされ、独り者や移動者がたえず出入りし、商品があふれ、独特の信頼関係や友人関係が存在した。また周囲の農村と異なり経済力や才能が自由に発揮できる都市的場を創出していたのである。

都市性の起源とその生成の魅力に着目した米山さんは、アフリカだけではなく日本においても祇園祭りや天神祭、神戸祭りなどの都市祭礼研究に精力的にとりくみ、農村・農民論とならぶ米山学の二本柱として確立していった。

米山さんの人間力

米山さんは、長い間、京都大学の教養部というところで教育にあたってこられた。現在は、ほとんどの大学で教養部は廃止され、学部化、大学院化がはかられているが、当時教養部は、大学に入学したばかりの1年生と2年生を対象に、一般教養科目の授業を提供する場所であった。したがって、各学部の専門課程に進学すると、それで教養との縁は切れることになった。しかし米山先生の研究室についていえば、例外的に、3回生以上や院生以上が集う空間となっていた。

米山さんは、手をとって足を取って学生を教育する教師ではなかった。またあちこちからポストや資金をとってきて分配するボスでもなかった。しかし、米山さんは、学生の稚拙な発想を実体以上に賞賛しやる気を出させる名人でもあった。決していぼったり権威的に振る舞うことのできない人でもあった。こうした米山さんの人間力に感化され、多くの多様な人間が先生のまわりを集って来た。それは人類学のみならず、文学、農学、経済学、理学、医学など多様なディシプリンの研究者だけでなく、新聞記者や役人、主婦からフリーターなども輩出し米山研究室はまさに梁山泊の様相を呈していた。

米山さんは永遠の世界へと旅立たれたが、米山さんがのこした、都市と農村を貫いて文明的にとらえる眼差しと自由闊達なフィールドワークの作風は、これからも若い世代に引き継がれアフリカ研究のなかで活かされていくに違いない。

合掌。

(まつだ・もとじ/京都大学)

付記：この文章は、『米山俊直の仕事 人、ひとにあう。 むらの未来と世界の未来』（人文書館、2006年）のあとがきから抜粋し加筆したものです。